

災害ボランティアネットワーク通信

二〇一四年三月一日

東日本大震災発生から丸三年を迎えました。私たちの活動も前身の真宗大谷派茨城一組「東日本大震災被災者を支援する会」から通算すると四年目に突入しました。その間、皆様からは本当に温かいご支援を賜り改めまして厚く御礼申し上げます。

昨年夏に私たちはNPO法人『災害ボランティアネットワーク』として再スタートしましたが、引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。



さて、時間が刻々と経過していくなかで避けられないのが風化の問題です。私たちは日頃の生活に右往左往し、あの日の出来事を、あの時感じた思いをつい忘れてはいないでしょうか。

二〇二〇年に東京五輪・パラリンピックの開催が決定しましたが、そのことにより東北の復興が遅れるのではないかと、という被災地の方々の不安の声も数多く聞きます。

間違いなくこの三月一日という日を迎えるにあたり、テレビをはじめとするメディアでは当時の映像を流し、現在の被災地の様子を伝えるでしょう。その効果でまた被災地へ数多くの目が向けられると思います。しかしまた時間が経てば、自分の生活に追われ忘れられてしまうのではないかと危惧しています。

第2号
2014年春

NPO法人
災害ボランティアネットワーク

茨城県古河市水海三〇一九

Tel 0280-91-3090

Fax 0280-23-2281

<http://saigai volunteer.net/>

私たちは、少しでもそうした現状に流れぬようこれからも被災された方々の声に耳を傾け活動し、さらに皆様へお伝えしていきたいと思えます。



↑津波が来た所にはその浸水深を示す表示があります。



ご寄付のお願い

★私たちの活動や願いにご賛同いただき、活動に伴う資金の寄付をお願いします。

★「ホームページ」にて、ご報告させていたただきたく思います。(お名前の記載は任意でございます)

★「災害ボランティア通信」を定期的に送付しますので、お振込みの際に、住所・氏名をご記入下さい。

★ともに活動して下さる方ならびに、支援して下さる会員を募集しております。詳しくはホームページをご覧ください。なるか、お電話にてお問い合わせください。

振込先… ゆうちよ銀行
加入者名… NPO法人

災害ボランティアネットワーク

口座番号… 0110-4-418730

「また来てね」(再掲)

茨城一組妙安寺 樋崎菜々

毎回、色々な仮設にお邪魔させていただくと、沢山の人からこの言葉をいただきます。

本当に待っていてくれる人や社交辞令で言ってくれださっている方など様々だと思いますが、今回の飯野川である女の子から言われたこの言葉は、本当に嬉しかったです。

飯野川仮設に初めて行ったのはちょうど一年前の七月でした。

そこでとても印象に残る女の子と出会いました。

現地に着いてから、ずっと近くには居るのですが、まったくニコリとも笑わないで、炊き出しの食べ物も「まずい」と言いながら食べたり、髪の毛を引っ張られるので、

「なんで？」って聞くと、「むかつくから」

とその一言で口をつぐんでしまいう子でした。



それからだいたい二か月おきに飯野川に行きましたが、毎回他の子供が家に帰ってもその子だけは私の近くを離れようとはしない中、
「ねー、菜々死んでよ。津波に流されて死んでよ」
「人間ってすぐ死んじゃうんだよ。だからお前も死んでよ」
「なんでこんな炊き出しなんかするの？みんなお金ないんだからこの分お金ちょうだいよ」と、毎回色々な言葉をもらいまして。

そして、絶対に帰りには「もー来なくていいから。会



いたくない」と言われ続けてきました。
「〇〇は会いたくなくても、私は会いたいからまた来るね」
そう言っついても帰ってきませんでした。今回初めて「今度はいつ来るの？また来てね」
暗闇で表情まではよく見えなかったのですが、その女の子が言ってくれました。嬉しくて涙がでました。初めて素直に感情を表に出してくれたと思います。

被災地の方々が、少しでも淋

しい気持ち・孤独な気持ちを抱え込まないように、これからも震災を風化させず、現地に足を運び続けよう！と気持ちを新たにした今回の飯野川でした。

この文章は前身の「東日本大震災被災者を支援する会」で発行しました活動通信二〇一二年七月号に掲載したものです。
この飯野川の仮設住宅には現在もお邪魔させていただいています。当時小学生だった子どもたちも中学生になり高校受験の話をしています。訪れるたびに子どもたちの成長に驚かされます。
時間が経過した今、何度も顔を合わし話をするうちに子どもたちも笑顔で親しみを持って私たちを迎え入れてくれます。
しかし、彼らが多くの悲しみを抱え、その悲しみを引き受けて今を生きていることを忘れてはいけないと思います。被災地の復興を担う彼らをこれからも応援していきたいと思えます。

被災地は今

二〇一三年十一月六〜八日

十一月の支援活動は、一日目に森林公園仮設住宅、二日目に追波川河川団仮設住宅を訪れました。

【一日目(六日)】

この時期、山の中腹にあるこの仮設には私たちの住む茨城と違い冷たい風が吹いています。



不便な場所にあるこの仮設住宅では若い人たちは次々と転居先へ移り、いまだでは年配の方々が多く生活されています。雪が降るようになると仮設の戸が凍ってしまうこともあるそうで、ここでの生活は困難を極めます。

ですが、ここにお邪魔すると皆さん集まってくださりいつも満席です。にぎやかに時間が過ぎていきます。



印象に残った言葉「いつも本当に来てくれてうれしい。有り難い。でもなんにもお返しすることができないことが本当に心から苦しい。」

私たちがいくら「気にしないでください。」と伝えても「本当に苦しい」と繰り返し繰り返しその方は訴えておられました。まさに「共に生きるがどこで成り立つか」が問われた気がしました。

【二日目(七日)】

ここの仮設の代表者の方が交替されたこともあり、住民の方々にうまく連絡が伝わっていませんでしたが、急遽呼びかけを行うとたくさんの方々に来てくれました。仮設住宅によつて自治会が組織されていたり、していなかったりします。さらに代表者の方が転居さ

れると今回のようなことも起こります。



ちよつと落ち着くとゆつくりお話することができるようになります。仮設に住む皆さんの交流の場になることを願っている炊き出しですが、私たちも輪に入り、お話を伺うことも大切に貴重な時間だと感じています。

活動点描

蓮の会

石巻の港の近くに浄土宗の西光寺さんというお寺があります。

ここでは毎月十一日に「蓮の会」という集まりを開いています。まずお経をお勤めし、そのあとお茶やお菓子を囲み茶話会をしているそうです。

入れ替わり立ち代わりする参加者のなか、その多くはお子さんや今回の震災で亡くされたお母さん方ということですが、周りは復興に向け前を向き歩もうとしているなか、なにをずるにも頭の中に思い浮かぶのは



わが子の顔。お母さん方はいまもなお深い悲しみと葛藤のなかにいます。

そんななか、お話ししてくださった西光寺の坊守さんの言葉が印象的でした。

「悲しみを悲しみのまま感じていいということに気付きました。」

活動報告

二〇一三年十一月六〜八日

…石巻市の森林公園仮設・追波川仮設にて炊き出し。

十一月二十日

…福島県二本松の青空市場に野菜などを届ける。

十二月十一〜十三日

…石巻市にて炊き出し

十二月二十〜二十二日

…福島県二本松の青空市場に野菜などを届ける。

福島南相馬を現地視察。

(後日、別冊で報告書を作成しお配りします。)

二〇一四年一月十五〜十七日

…石巻雄勝町水浜の方々と懇親会。山崎前仮設住宅にて炊き出し。

二月十二〜十四日

…追波川運動公園仮設住宅・北高飯野川校仮設住宅で炊き出し。

今後の予定

三月十日

…福島県二本松市の青空市場に野菜などを届ける。

三月十〜十二日

…石巻雄勝町水浜の方々と地震発生時間に合わせ鐘を鳴らす。

四月十六〜十八日

…内容未定。

五月七〜九日

…内容未定。

編集後記

先月、東京都知事選挙が行われました。原発問題を争点として立候補された方もいました。原発問題を選挙の争点とすることに反対した人は「原発問題は国の問題だ」と主張しました。本当にそうでしょうか。現に今もなおいのちの危機にさらされている人がいるのは国だけの責任でしょうか。これからは生きる子どもたちのためにも原発問題を全人類的課題として受け止め考え行動していく責任が私たちひとりひとりにあるように思います。

現在、当法人代表が福島を訪れたときの報告書を作成中です。完成次第、皆様のお手元にお届けいたしますので、ぜひ読んでください。

左のバーコードは、当方のホームページに直結しております。どうぞご利用ください。

(岩松 知也)

